楠山正雄のアンデルセン翻訳（上）

――全集の新旧版の比較――

南　菜　緒

はじめに

楠山正雄は、当時の児童文学の発展に大きく貢献した人物である。しかし児童文学以外にも演劇や辞典編集まで幅広く文学活動をしていたためか、これまでの楠山研究史において、児童文学者としての彼に焦点を当てた研究はあまり多くない。

そこで本論文では、今一度研究する価値のある人物として児童文学者・楠山正雄を探っていく。研究の主軸として、特に彼が傾倒したというアンデルセン童話に注目し、生涯で二度に渡って試みているアンデルセンの翻訳全集について、その旧訳と新訳を比較する。目次やまえがき、解題など、主に作品以外の部分から、改訳の意図を考察するとともに、アンデルセンからの影響関係、楠山の童話観、児童文学への態度を明らかにしたい。

一　児童文学者としての楠山正雄

まずは、彼の三男・三香男氏の『楠山正雄の戦中・戦後日記―辞典編集・演劇・童話の仕事を誠実に追う―』[一]や昭和女子大学近代文学研究室の『近代文学研究叢書』第六十八巻[二]の「楠山正雄」を参考に、楠山正雄の略歴と児童文学者としての功績を紹介する。

楠山正雄は、演劇評論家、編集者、そして児童文学者として知られる人物である。彼は一八八四（明治十七）年十一月四日、東京銀座に生まれた。三歳で石版印刷業を営む父を失い、家運が次第に傾いて、少年期は親戚の家を転々とした。その後早稲田大学英文科に入学し、英文学に限らず広くヨーロッパの諸文学を学んだ。この頃に島村抱月[三]から強い影響を受け、この抱月との出会いは楠山に独自の美学を確立するという生涯の目標を起こしている。

早大卒業後は、早稲田文学社、読売新聞、冨山房[四]の編集に携わり、楠山の編集者としての活動の起点となった。この冨山房には一九一〇年に坪内逍遥[五]の推薦で入社し、以後同社に軸足を置いて幅広く業績を展開していくこととなる。

一九一一年、今度は評論「菊五郎と吉右衛門と」（「早稲田文学」）で劇壇に認められ、以来演劇評論家としての地位を固めた。一九一二年には中谷徳太郎[六]らと演劇雑誌「シバヰ」を創刊して自らも戯

曲を発表、一九一三～一九一五年には早稲田大学講師となって近代劇を講じ、また抱月主宰の芸術座[七]に加わるなど、編集の仕事の傍らで演劇界にも積極的に関わっていった。

しかし一九一九年、楠山は熱心に打ち込んでいた演劇界から、一旦身を引くに至った。この背景には芸術座解体がある。芸術座は、一九一八年十一月五日に結成者である島村抱月がスペイン風邪で急逝、翌一九一九年一月五日に抱月の後を追って看板女優の松井須磨子が自殺したために解散した。そしてこの二人の死の間の二か月、楠山は座内で須磨子との関係を疑われ、査問まで受けるという事態になっていた。これは須磨子と脚本部との間の亀裂や、抱月の死後に楠山を頼った須磨子の挙動から生じた全くの誤解であった。実際の楠山は逍遥に抱月弔問を要請し、また須磨子を逍遥に引き合わせて関係修復を図ろうとする[八]など、事態の緩衝に努めていたという。この芸術座解体前後の騒動をきっかけに、楠山は近代劇の翻訳や紹介等の活動を控え始めた。そしてそれから十数年を経た一九三七年に「東京朝日新聞」の各座月評を引き受けるまで、劇壇から距離を置くことになるのである。

辞典編集・演劇評論活動というライフワークに加え、楠山が児童文学へ関わりを持つようになったのは、冨山房の叢書『模範家庭文庫』（一九一六～一九三二）の編集への参画からである。つまり児童文学の世界には、編集活動が元になって足を踏み入れたのである。まだ芸術座でも活動していた一九一五年、当時三十一歳の楠山は、まずは杉谷代水[九]の遺稿となった翻訳『アラビアンナイト・上下』、中島孤島[一〇]訳の『グリム御伽噺』の原稿整理を任された。この二点三冊に次いで翌一九十六年、今度は自身が『新譯イソップ物語』を出した。これが楠山の子供向けに書く初めての本であり、同叢書には、続いて一九一九年『世界童話寶玉集』、一九二一年『日本童話寶玉集』上、翌一九二二年『同』下、一九三一年エクトル・マロー作『少年ルミと母親』を刊行していった。

楠山が児童文学の分野に入っていったことに関して、楠山三香男氏は次のように述べている。[一一]

この展開は偶然ではなかったろう。大正時代に入り、ことに第一次世界大戦を機に、日本国内には改めて国際化、文化生活向上の風潮が盛り上がり、子供向けにも文芸興隆の波が高まった。冨山房は創業間もなくから教科書を扱い、子供向け図書への意識は強く、（略）編集と演劇という、それまで経験を積み、蓄えてきた財産を、正雄は新しい分野の開拓に生かした。自然に体が動いたというところか。

こうして『模範家庭文庫』から出発した楠山の児童文学者としての活動は、その後さらに広がりを見せる。一九一六年には小川未明[一二]らと童話作家協会の創立につとめ、その後「赤い鳥」[一三]、「童話」[一四]、「金の船」（「金の星」）[一五]など大正期の代表的な童話雑誌に数多くの作品を発表し、児童図書の画期的な発展に寄与した。

楠山の児童文学への取り組みは、先に述べた一九一九年の演劇界からの離脱と入れ違うように本格化し、その童話は翻訳、再話、創作へと広がり、題材も古今東西に及んでいった。演劇評論から一転し、童話が楠山の著述の主要軸となっていったのである。

一九三七年に演劇界への復活を遂げた以降も、楠山は著しく童話

を発表し続けた。晩年の一九四九年からは、童話の集大成『世界おとぎ文庫』（小峰書店、二十四巻の予定）や『新訳アンデルセン童話集』（同和春秋社、五巻の予定）を刊行し始めたが、一九五〇（昭和二十五）年十一月二十六日、ガンで死去した。享年六十六歳。病床に就いてからも執筆活動を続けていたという。

三十一歳からの三十数年間で、楠山は他にも非常に多くの児童文学作品を残しており、その多様な外国児童文芸の日本受容、日本の伝説や昔話の再話などによって、当時の日本の児童文芸の発展に大きく貢献している。楠山の著作に関しては、ここではこれ以上の詳細には触れないでおくが、昭和女子大学近代文学研究室の『近代文学研究叢書』第六十八巻[二六]に詳しい。

二　アンデルセン翻訳

ハンス・クリスチャン・アンデルセン（Hans Christian Andersen）は、デンマークの文学者、童話作家である。彼は一八〇五年四月二日、フューン島のオーデンセに生まれた。十五歳で俳優を志し首都コペンハーゲンに出るも、その目的を達成できず挫折を繰り返した。しかし当時の有名な政治家ヨナス・コリンの援助でラテン語学校に学び、ついでコペンハーゲンの大学を卒業した。

一八三三年のイタリア旅行をもとにした『即興詩人』（一八三五）は、まずドイツで好評を博し、彼の文名をヨーロッパじゅうに響かせる出世作となった。同年の『童話集』は彼の童話作家としての出発点となり、それ以来毎年クリスマスには彼の『童話集』が人々から待たれた。童話の創作は一八七〇年頃まで続き、その総数は一三〇編以上に及ぶ。彼の童話の特色は、その抒情的な情緒と、美しい幻想の世界と、あたたかいヒューマニズムにある。一八七〇年代の初めから病身となり、一八七五年八月四日、友人の別荘で永眠した。代表作に『親指姫』、『みにくいあひるの子』、『赤い靴』、『絵のない絵本』などがある。

この著名な童話作家アンデルセンに、楠山は殊に傾倒していた。楠山が初めてアンデルセンの翻訳を手掛けたのは一九一九年、『模範家庭文庫』の『世界童話寶玉集』であった。アンデルセンの『お伽ごよみ』をプロローグに置いて、その四十頁全てを色刷りの挿絵で飾る絵本仕立てに、また全編をこよみ仕立てにしている。結びにもアンデルセンの『クリスマスの木』を『青い鳥』と並べ、その当時から楠山のアンデルセンへの傾倒が並でなかったことが窺える。

その四年後の一九二四年には、新潮社から『アンデルセン童話全集』第一巻を刊行し、ここから彼は本格的にアンデルセン童話の翻訳に取り組んでいく。第一巻にはアンデルセンの初期作品が収められ、そのうち十余話は初の邦訳であった。巻頭の「おぼえがき」では、ドイツ版二種、アメリカ版、イギリス版の計四種の底本で百四十三篇を収録したとしているが、三十八篇を収めた第一巻以降、この全集は途切れている。

翌二五年からの、小学校の各学年にあてた六冊のシリーズ『画とお話の本』では、四年生用のものにアンデルセンの『おやゆび姫』を用いている。

一九三八年には冨山房百科文庫に『アンデルセン童話集』第一巻～第四巻を刊行し、四冊計六十篇に丁寧な解説を施している。これはドイツ語版全集を新訳し、デンマーク語版で再訂した童話集であ

り、『小さい人魚姫』、『一本足の兵隊』、『雪の女王』、『ある母の物語』を構成しているが、続刊の予定は中絶している。『一本足の兵隊』の中に出てくる歌の訳を比較した鳥越信は、楠山訳は「日本的情緒」に浸っておらず、アンデルセンの内容を理解していると高く評価している。一七

翌年の一九三九年には十八篇の選集である『アンデルセン童話集』を新潮社から刊行している。その解説の中で楠山は、一九二四年の『アンデルセン童話全集』の続刊が途切れたことについて、「それなりとりまぎれて、あともはかばかしくは続けかねている」と述べている。また、アンデルセンとグリムを比べ、

グリムの童話は、グリム兄弟が國語研究の片手間に、古く口碑に傳はってゐる国民説話を集めて、それを文字に書き残したといふだけであるが、アンデルセンは親しく両親の膝の上で聞いたむかし話、又は田舎家の炉辺で、或は工場の仕事場で、百姓の爺さんや糸取り婆さんたちから聞いた民話を、おもしろく書き集めたばかりでなく、自分の頭の中にお伽噺の國をこしらへて、空想の美しい王子王女や、不思議な妖女や妖精を自由自在に舞ひ踊らせ、中世の『アラビヤアンナイト』にも比べられる近代の新しい御伽文学をつくり出したのである。

と述べており、楠山がアンデルセンにどれほど傾倒していたかが伝わってくる。楠山三香男氏はこの童話集の解説について、「時に、正雄は五十五歳、さまざまな場合それぞれに、解説を数多く書いているが、この文庫版では、アンデルセンへの思い入れを語って、異色の筆致を示したものとなっている。」と指摘している。一八

さらにそれから十年後の一九四九年、晩年の楠山は同和春秋社から『新訳アンデルセン童話集』を刊行した。デンマークの言語版が底本で、全五巻の予定だったが、その死によって、第二巻・六十一話で終了となった。また同年小峰書店から刊行した『世界おとぎ文庫』の第一冊目も『人魚とお月さま＝アンデルセン童話名作集』であったが、同文庫をアンデルセンから始めたことについても楠山三香男氏は「格別の思い入れがあってだろう。」と述べている。一九

このように生涯を通してアンデルセン翻訳に力を注いでいた楠山だが、アンデルセン翻訳史における彼への評価は、一体どのようなものであったのだろうか。

翻訳文学に関して最新情報まで網羅していると定評の高い『図説翻訳文学総合事典』二〇では、アンデルセンの項に楠山の名が出ているのは『にはとこのおかあさん』、『おばあさん』、『すだまの丘』の三作のみである。いずれも一九二四年の『アンデルセン童話全集』第一巻の中の作品で、初訳として記載されている。この資料には初訳以外に全集類の解説もあるが、主に名が挙がっているのは大畑末吉二一や矢崎原九郎二二であり、全集が全て未完に終わっている楠山については一切触れられていない。

一方、各作家の翻訳作品が列挙される形になっている『明治・大正・昭和翻訳文学目録』二三では、アンデルセンの全集や童話集の欄に楠山のものも載せられている。一九三八年の童話集を除いて、一九二四年の最初の全集、一九三九年の文庫版の童話集、一九五五年二四の新訳の全集の三つが挙がっている。全集類のうち最も古いのは一九一七年、楠山の携わっていた冨山房『模範家庭文庫』から刊行

された、長田幹彦の『アンダアセン御伽噺』になっている。

次いで一九二一年に樋口紅陽『アンダアゼンお伽噺』（精華堂）、一九二二年に少年通俗教育会『アンダアセン物語』（『世界童話』五集、博文館）と森川憲之助『アンデルセン童話集』（真珠書房）、一九二三年に山崎貞『アンデルセンお伽噺』（北星堂）があり、その後に楠山の一九二四年の『アンデルセン童話全集』第一巻が刊行されており、この楠山の最初の全集はアンデルセン翻訳史において比較的早い段階のものであることが分かる。

楠山の作品は、全集類以外にも、『鐘』（『世界文学全集三十六近代短篇小説集ノ内』新潮社、一九二九年）、『一本足の兵隊』他十篇（『冨山房百科文庫アンデルセン童話集』二集、冨山房、一九三八年）、『ある母の物語』他二十二（『冨山房百科文庫アンデルセン童話集』四集、冨山房、一九三九年）、『おやゆび姫』他十九話（『新訳アンデルセン童話全集』第一巻、童話春秋社、一九五〇年）の四作品が掲載されており、楠山のアンデルセン関係の翻訳の多さが注目されている。

また、『比較文学辞典』[二五]のアンデルセンの項には、「翻訳者には森鷗外をはじめ、楠山正雄、小山内薫、鈴木三重吉、竹友藻風、浜田浩介その他多くの人の名をあげることができるが、大畑末吉、番匠谷英一、矢崎源九郎などの名もあげねばならない。」とあり、森鷗外に次いで、アンデルセンの日本受容に貢献した人物として楠山の名が挙げられている。

以上の通り、資料によって多少の相違はあるものの、アンデルセン翻訳史において楠山が果たした役割は看過できないものがある。彼の功績は、現在から再評価することが重要であろう。

そこで第三章では、楠山のアンデルセン翻訳の最初の全集である『アンデルセン童話全集』第一巻（新潮、一九二四年）と、晩年の『新訳アンデルセン童話集』[二六]第一巻、第二巻（同和春秋、一九五五年[二七]）について、以降は前者を「旧訳」、後者を「新訳」とし、新旧の比較考察を行う。その際、新訳の方を中心にして、旧訳との違いを明らかにしていきたい。なお、新訳については、遺稿を加えた第三巻は比較の対象外とする。

三　全集の新旧比較

まず、装丁における相違は、新訳には絵や写真など、視覚に訴えるものが多いという点である。表紙と裏表紙だけでなく、扉にも、第一巻ではアンデルセンの肖像画「ハンス・クリスチャン・アンデルセン」、高橋秀による「おやゆび姫」、「野のはくちょう」という絵、さらに第二巻でも「アンデルセン記念館にあるアンデルセンの像」と題された写真、第一巻と同じく高橋秀作の「豚飼」、「雪の女王」という絵が各一頁ずつ収められており、視覚的にも楽しめるようになっている。

また、旧訳には一切なかった挿絵も、新訳では頻繁に載せられている。楠山三香男氏によれば[二八]、「五巻としたのは原語版の五分冊に合わせ、挿絵もアンデルセンが在世中に描かれたものということで、大きさも同じにした」のだという。五巻の予定で進められていたのは旧訳も同じだが、新訳では本の装丁をより原語版のものに近付けようとするこだわりがあったと思われる。

次に目次を見てみると、扱っている作品もその順序もほぼ一致しているものの、題名の訳し方の違いが大きい。例えば最初の五作品

だけを挙げてみても、旧訳は『火うち箱』、『大クラウスと小クラウス』、『豌豆の上に寝た王女』、『小さいイーダの花』、『親指姫』で、これが新訳になると『ほくち箱』、『小クラウスと大クラウス』、『えんどう豆の上にねむった王女』、『ちいさなイーダのお花たち』、『おやゆび姫』となり、漢字が平仮名になったり表現が違ったりと、これ以外もほとんどの作品の題名に何かと変化がみられる。

先に作品とその順序について「ほぼ一致している」と述べたが、旧訳では掲載されていた作品が、新訳ではなくなっている部分もある。新訳の第一巻は十六話目の『こおのとり』で終わり、続く第二巻は『ばらの妖精』から始まっているのだが、旧訳ではこの間に『青銅の豚』、『義兄弟』、『ホメールのお墓の薔薇』、『眠神』の四作品がある。なぜ改訳後この四作品が抜かれたのかについては不明だが、新訳も未完のまま終わってしまっているので、第三巻以降に書くつもりでいたのかもしれない。

反対に、旧訳は三十八話目の『デンマルクぢいさん』で終わっているが、新訳の第二巻ではそれ以降も『マッチ賣のむすめ』、『お城土手の風景畫』、『養老院の窓から』、『ふるい街燈』、『おとなり同志』、『ソークちゃん』、『影』と七作品続いている。

目次に関してはその他に、『幸福のうわおいぐつ』（旧訳では『幸福の上靴』）、『雪の女王』の長編二作品について、新訳は題名のみでなく章題も載せられており、旧訳より詳細な内容を示す目次となっている。

続いて作品導入の前に配されたまえがきに注目すると、この部分から読み取れる楠山の意識の変化は非常に興味深い。まずは旧訳の「おぼえがき」（目次では「譯者のおぼえがき」）を見てみよう。

この全集はドイツの Insel 出版の二冊本にある百十七篇、同じく Reclam 本の百三十七篇、アメリカの Houghton Miffin 出版二冊本の百三十八篇、イギリスの Oxford 版の六十篇を底本として、すべて百四十三篇の物語を収・したものである。デンマルク原語の全集は知らないが、重譯本としては、少くとも量に於てこれ以上の充實を求めることはできない筈である。（中略）こんどこの本ではじめて邦訳された作は八十篇以上に上るであらうから、全作篇のほゞ三分の二は新譯であるといつてよい。この第一集に收めた三十八話には、（略）名作を多く含んでゐるにも拘らず、その中の十餘話ほどはこれまで邦譯されたものがなかつたとおぼえてゐる。

楠山自身が、ドイツ語版二種、アメリカ版、イギリス版の計四つの底本を用いていることをここで明らかにしており、それまで翻訳されていなかった作品も多く扱っていることへの確固たる自信が示されている。

これに対し、新訳の「まえがき」では、楠山は次のように述べている。

三たび、アンデルセン童話集を手がけることになりました。それをよい機会に、できるだけひろくさぐりあつめて、全作篇の翻訳を完成させたいとねんじております。一部分出ておりますわたくしの旧訳はもちいず、いつさい新訳するについて、原話のかたちとはたらきとを、つとめてくずさず、それをそのまま、

われわれのことばとして生かしきることに、いささか力をもちいてみました。

新訳は旧訳とは完全に別物として作成し、デンマークの原語を底本として原語版の正確な翻訳を意識していることが示されている。旧訳の「おぼえがき」での誇りに満ちた書き方とは雰囲気が違い、謙虚な態度が窺い知れる。旧訳では「知らないが」と言っていたデンマーク原語に新訳で取り組み、二十数年の間で楠山の翻訳への意識が変化していることが分かる。

また、まえがきと作品との間に挿入されているものについては新旧で異なっている。旧訳では「おぼえがき」の後に、ストリンドベリ[二九]の言葉の引用、「アンデルセン著作年譜」が続く。一方新訳では「まえがき」に次いで楠山正雄の長男・楠山春樹による「新訳『アンデルセン童話集』のはじめに」がある。次から一つずつ見ていきたい。

まず旧訳だが、目次には書かれていないにもかかわらず、一頁を使ってストリンドベリの言葉が載せられている。本文は次の通り。

シュウェーデンではハンス・クリスチヤン・アンデルセンと呼ぶものはない、單に短くアンデルセンといふ。それはわたし達の知つてゐるアンデルセンはたゞ一人しかないからだ。それはわたし達の兩親のアンデルセン、それからわたし達の子供の時代の、おとなになつての、そして老年になつてのアンデルセンである。

子供の時分、クリスマスにもらふカレンダーにしるされた詩といふものは、いつもこしらへものの、一向に散文じみたものであつた。アンデルセンの童話を手にふれて、わたしははじめて、かういふのが詩といふのではないかと思つた。

おとなに聞くと、

「いや、これは散文さ。」

と答へた。

「これが散文かしら。」

——August Strindberg——

このように、ストリンドベリがアンデルセンを高く評価していたことの分かる文章が引用されており、この挿入は旧訳の読者へアンデルセンの高名を知らせるためのものであると思われる。ストリンドベリを引用したのは、楠山が演劇界でストリンドベリの戯曲の翻訳や評論を多く扱っていたことが関わっていると考えられる。事実、楠山はちょうどこの旧訳を刊行した一九二四年前後に、『ストリンドベルク戯曲全集』(新潮、一九二三～一九二六)[三〇]に取り組んでいる。

この次の「アンデルセン著作年譜」は一八〇五年から一八四六年までのアンデルセンの年譜で、彼の略歴と、作品発表に関して材をどのように取ったかなどが中心に書かれている。その最後には「以上四十二年、この間にこの全集第一集に收めた三十八話の著作年代がふくまれている。」との記述がある。

これらの挿入からは、旧訳ではアンデルセンの人物像に重点を置き、読者にそれを紹介しようとする意図があると考えられる。「おぼえがき」にもその意図が表れている部分があるので、次に引用する。

アンデルセンの童話を、作者みづからの素朴なしかし不思議な生活記・からひきはなして讀むことはできない。アンデルセンの童話は、彼の「身の上の物語」の短い斷片であり、彼の「身の上の物語」はそのまゝに一個の童話の長い連續である。たとへば（略三）「雪の女王」の廂間のいぢらしい箱庭に遊ぶ少年少女の幼い戀の物語には作者が生れて育つた裏町の屋根裏住居の記憶がまざ／＼と生きてゐる。アンデルセンの自傳――彼のいはゆる「身の上のお伽物語」（MärchenmeinesLebens）は、その意味で彼の童話をよむ人の一度はよんで置いていいものである「童話全集」を完成したあとで譯者に餘力があつたら、その主な部分だけでも鈔・して置きたいと思つてゐる。

ここではアンデルセン童話の造形に関わる作者の「身の上の物語」に注目し、また読者にアンデルセンの自伝を勧めている。

以上、旧訳の「おぼえがき」、ストリンドベリの言葉の引用、「アンデルセン著作年譜」の記述から、旧訳では各作品に入る前に、アンデルセンの人物像やその形成過程について積極的に読者へ伝えようとしていることが分かる。

一方、新訳の「新訳『アンデルセン童話集』のはじめに」（楠山春樹）には、楠山が二度目のアンデルセン全集を手掛けることになったいきさつや病床についた楠山の様子などが書かれ、新訳の企画について、「その全集は、原語版の五冊を、本文も挿絵も原ページのとおりに五冊に分冊して、形の上からも原著者の息吹をそのまま移し植えよう、とのもくろみで始められ、」とある。この春樹氏の「新訳『アンデルセン童話集』のはじめに」や、楠山自身による「まえがき」の記述からは、楠山が原語版の全集の形をできる限り残すような翻訳を目指していたことが分かる。

新訳ではこの他、各巻の巻末に改題が載せられている。改題では、各作品の邦題の下にデンマーク語で原文の題名が書かれ、作品ごとに丁寧な説明がされており、その中にはアンデルセンがその作品を執筆した経緯や、作品に込めた想いを伝えるようなものが多くみられる。

このような部分から、新訳は旧訳と比べて、アンデルセンの人物像よりも作品自体を重視していると考えられる。もちろん新訳にもアンデルセンの人物像については書かれているが、おぼえがき・ストリンドベリの言葉・著作年譜と三段階で強く押し出している旧訳と比べれば、新訳での人物像の紹介はその必要性を満たすだけのものとなっており、それよりも作品それ自体を原語版通りに伝えるという点に力が入れられている。

おわりに

三十代で童話を書き始めて以来、その半生で長くアンデルセン童話を翻訳し続けた楠山にとって、一九四九年からの『新訳アンデルセン童話集』は児童文学者としての集大成であった。彼がそれを完成することなくこの世を去ってしまったのは誠に惜しまれることだが、この新訳で成し遂げた功績は、それまでの彼の翻訳と共に、後世に残る意義深いものである。

本論文では全集の新旧比較を中心に研究を進めたが、新訳と旧訳

の最も大きな違いは、結局のところ翻訳に対する楠山の姿勢であったろう。第三章で見てきた通り、旧訳では初訳を多く手掛け、アンデルセンという作家を積極的に日本に受容しようとしていたが、その翻訳は重訳であった。一方で、新訳では原語版からの翻訳に取り組み、原作に忠実な翻訳を目指した。新旧の全集で、楠山の意識には大きな差があるのである。意識の差は、作品内容の変化にも繋がっていると考えられるが、これに関しては別稿にて詳しく検証していきたい。

楠山は新訳の「まえがき」で、

> 國語と國民をこえた世界文学というものがほんとうにあるかどうか、あれば、それは、おそらく、こどものためのお話の文学――童話の文学があるだけでしょうか。その童話の文学のなかでも、しかし、ほんとうに世界文学としての普遍性を、こののちながく、ゆたかにもちつづけうるものがどれほどあるでしょうか。そのすくないなかのもっともすぐれたひとつが、アンデルセンの童話であることは、今日、世界のどこの國民でも、かれらの幼少年時代の教養のひとつとして、アンデルセン童話のひとつふたつ、よむかきくかして育てられなかったもののまずないといえるので分かるでしょう。ですから、アンデルセンそのひとは、また、こどものための永遠のゆりかごをゆする、かずすくない世界的詩人のひとりでもありました。

と述べている。楠山が童話を、そしてアンデルセンを、どれだけ敬愛していたかが窺い知れる。こうして彼が熱意を込めて取り組んだ翻訳作品は、アンデルセン翻訳史の上でも重要な役割を果たしている。今後、児童文学者としての楠山正雄、彼のアンデルセン翻訳が再評価されることを期待したい。

一 楠山三香男『楠山正雄の戦中・戦後日記―辞典編集・演劇・童話の仕事を誠実に追う―』（冨山房、二〇〇二年四月）

二 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第六十八巻（昭和女子大学近代文化研究所、一九九四年六月）

三 一八七一～一九一八年。評論家、演出家、初期新劇運動の指導者。英・独留学を経て帰国後一九〇六年に師の坪内逍遥と文芸協会を設立、「早稲田文学」を復刊して評論『囚はれたる文芸』を発表。さらに新興の自然主義文学を擁護し文壇に大きな影響を与え、近代文芸批評の確立者となった。一九一三年松井須磨子と芸術座を結成。

四 一八八六年坂本嘉治馬が小野梓の東洋館を継いで創業した出版社。

五 一八五九～一九三五年。小説家、評論家、翻訳家、劇評家。一八八五年の『小説神髄』、『当世書生気質』で写実主義を提唱し、日本の近代文学の先駆者となった。一八九一年「早稲田文学」創刊。シェークスピアの研究・翻訳や、文芸協会を主宰して演劇運動にも尽力した。

六 一八八六～一九二〇年。小説家、劇作家。大正年間「早稲田文学」「文章世界」や自身編集の「シバヰ」など演劇雑誌に多く作品を発表するも文壇に広く認められるにいたらなかった。遺稿集に楠山正雄編集の『孔雀夫人』（富士印刷出版部、一九二一年二月）がある。

七 文芸協会を脱退した島村抱月と女優松井須磨子を中心に一九一三年に結成された劇団。当初経営に行き詰ったが翌一四年帝国劇場で上演したトルストイの『復活』が劇中歌「カチューシャの唄」とともに大ヒットした。

八 逍遥と抱月は師弟関係だったが、抱月と須磨子のスキャンダル発覚が逍遥の怒りを買った。逍遥と抱月を中心に一九六〇年に結成されていた文芸協会は分裂しかけ、抱月は幹事を辞任、逍遥は須磨子に退会を求め、自身も二年余りで演劇運動を断念した。

九一八七四～一九一五年。詩人、劇作家。一八九八年に坪内逍遥の推挙で冨山房に入社し、逍遥編尋常小学校、高等学校の『国語読本』の編集に携わった。一八九七年頃から新体詩、一九〇五年からは歌劇の創作にあたった。

一〇一八七八～一九四六年。小説家、評論家、翻訳家。多くの評論や美文、小説を発表したが、明治末期に組織した反自然主義の文藝革新会の活動が終わると自ら文壇を去った。以降児童もの、歴史ものの著作翻訳に従事し、『ギリシヤ神話』（一九二一年）、『暗黒時代史』（一九一六年）などを出した。

一一脚注一に同じ。

一二小説家、童話作家。「日本児童文学の父」と呼ばれ、近代的な児童文学の興隆に大きく寄与した。代表作に『赤い蝋燭と人魚』など。

一三児童文芸雑誌。一九一八年七月～一九三六年十一月（一九二九年三～五・十二月は休刊）。鈴木三重吉主宰で、赤い鳥社発行。芸術的な創作童話と童謡を作ることを目指し、日本の児童文芸の発展に大きく貢献した。

一四児童雑誌。一九二〇年四月～一九二六年七月。千葉省三編集、コドモ社発行。大正期の童話童謡時代の一翼を担った童話童謡雑誌。

一五児童雑誌。一九一九年十一月～一九二九年七月、全百十六冊。「金の船」は齋藤佐次郎編集、島崎藤村、有島生馬の監修で、キンノツノ社から創刊されたが、一九二二年六月号から誌名を「金の星」とし発行所を金の船社（一九二三年一月から金の星社）と改めた。

一六脚注二に同じ。

一七鳥越信「アンデルセンと日本童話」（日本児童文学学会『アンデルセン研究』小峰書店、一九六九年）

一八脚注一に同じ。

一九脚注一に同じ。

二〇川戸道昭・榊原貴教『図説翻訳文学総合事典』第二巻（大空社、二〇〇九年十一月）

二一一九〇一～不明。独文学者、翻訳家。原文からのアンデルセンの翻訳『アンデルセン童話集』全十冊（岩波文庫、一九三八～一九四六年）、『自伝』『絵のない絵本』、『即興詩人』が有名である。

二二一九二一～一九六七年。北欧文学者、言語学者。東京大学言語学科を卒業し、東京教育大に教鞭をとった。著書に『言語学概論』、『日本の外来語』（岩波新書、一九六四年三月）などがあり、児童文学ではアンデルセン『童話名作集』、『絵のない絵本』、デ・アミーチス『クオレ』など翻訳多数。

二三国立国会図書館『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（風間書房、一九五九年九月）

二四最初の発行は一九四九年だが、一九四九～一九五五年の間に出版された分は絶版となり、五五年それに遺稿の分を加えて新たに三冊の作品となったようである。

二五松田穣『比較文学辞典』（東京堂出版、一九七八年一月）

二六題は「童話集」となっているが、アンデルセン童話の「全集」として企画されたものである。

二七脚注二四に同じ。

二八脚注一に同じ。

二九アウグスト・ストリンドベリ（August Strindberg）一八四九～一九一二年。スウェーデンの作家。一八七九年自然主義的な自伝小説『赤い部屋』で名声を得、スウェーデンにおける新しいリアリズムの代表者と呼ばれた。一八九七年頃からは象徴的・神秘的世界が開け、自在に両方の世界に出入する趣をみせた。

三〇全五巻の予定だったが、第一巻は未刊、第四巻は三井光弥の訳で、楠山は第二、三、五巻を担当した。

三一中略した部分はその後の『雪の女王』のくだりと同じく、アンデルセンの経験が作品に投影されている例。『變な家鴨の子』と『旅なかま』について。